アジアにつながる文化の輪！

日比野克彦氏率いる「ポントゥン村・美術部プロジェクト」～ラオスの小さな村でゴロゴロ祭り～

2015.02.04

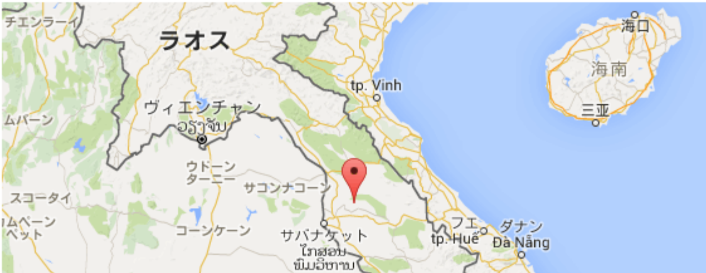
55 ツイート 0

いいね！ G+1

ラオスの小さな小学校へ

ラオスの農村部ポントゥン村で開催されたアートプロジェクトに参加してきました。
まず、村に到着するまでの道のりの長いこと長いこと……。

タイのバンコクで日比野克彦さんらスタッフと合流し、飛行機で 約1時間、タイとラオスの国境の街ナコン・パノムに向かいました。ここから車に乗り換えて、陸路でラオスへと国境を超えます。3時間かけてようやく小学校のあるポントゥン村の入り口に到着です。



タイ
ナコーンラーチャシーマ
スリン
ウボンラーチャターニー
ベトナム
バンコク
กรุงเทพมหานคร
tp. Pleiku
クイニョン
Google
Map data ©2016 Google

それでもまだまだ到着しません。そこから舗装されていない赤土のでこぼこ道に突入し、ロデオのように弾ける車内でお尻が浮く程の揺れを感じながら、途中、牛や羊に遮られたり、川に架かる丸太を並べた心もとない小さな橋を超え、ようやく小学校に到着です！

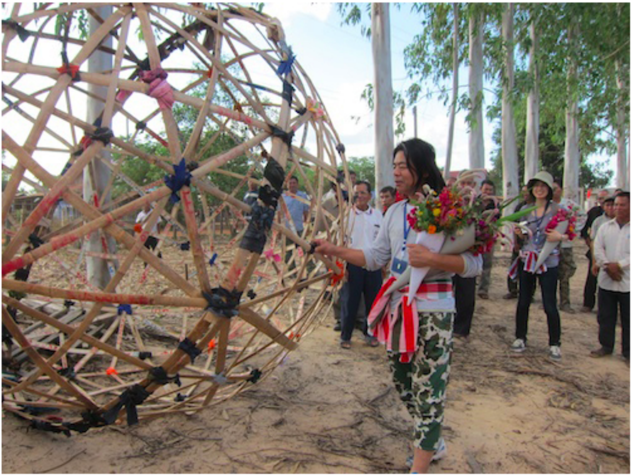
到着するとすぐに子供たちが集まってきて整列し、花道を作ってくれました。今年で4回目の訪問となる日比野さんは、子供たちだけでなく、村長さん、校長先生たちからも熱烈な歓迎を受けます。

手作りの日本とラオスの旗を手に日比野さんを出迎える子どもたち

日比野さんがこの村に来たのは、「ポントゥン村美術部プロジェクト」という美術教育を行うためです。昨年までの3年間は、日比野さんが子供たちに 水彩画のワークショップを実施してきました。それまでこの学校の子供たちは、 絵の具で絵を描いたことがなかったのです。

今年は、日比野さんだけでなく、若手アーティストの佐藤悠さんが現場に3週間前から滞在して、このプロジェクトの準備を進めています。佐藤さんは日比野さんが教鞭をとる東京藝術大学博士課程に在籍していて、「一見何も無いところから、誰かが関わる事で表現が紡がれてゆく現場を作る」という表現活動を行っています。その佐藤さんが準備しているものはというと…？

校舎の端に何か大きなボールのようなものが見えてきました。



「大きなボール」を確認する日比野さん

今年は、現地の竹を用いた巨大なオブジェを制作し、このオブジェを使って、村全体を巻き込んだ美術プロジェクトにすることを試みたというわけです。

この竹でできた巨大オブジェは「ゴロゴロ」といって、元々、日本の新潟県の莇平（あざみひら）という集落でスタートしたものです。この集落に関わる人たちを動員し、坂道しかない村の道を使ってゴロゴロを転がし、集落の人たちにパレードに参加してもらうという、一つの参加型アート作品なのです。

歓迎会が開かれ、村の人々は日比野さんたちの旅の安全を祈る儀式を執り行います

村では貴重な水牛や鶏、そして村で普段よく食べられている餅米やカエル料理が振る舞われました

ゴロゴロパレード当日

ゴロゴロ当日の朝、お面制作のための道具をマーケットで調達

翌朝、日比野さん、佐藤さんたちは、現地のマーケットで調達した紙とビニールテープを手に、学校に向かいました。子供たちと一緒にお面の制作をするためです。このお面は、子供たちがもっと楽しくパレードに参加できるようにと考えられた制作アイディアの一つです。

基本的な作り方を教え、あとは自由に自分の創作を加えてよいことを伝えると、最初は戸惑っていた子供たちは徐々に手を動かし始めました。

お面をハチマキのよう頭に巻く男の子もいれば、スカートのようにして腰に巻いて飾りにしてしまう女の子もいます。気がつけば、みんなはしゃぎながら夢中になって、オリジナルなお面や装飾が次々に出来上がってきました。

お面を各々好きなスタイルで制作する子供たち

他にも、年少のクラスではペットボトルにビニールひもで飾りをつけ、中に石を入れた楽器のようなものを作成しました。音を鳴らしながら歩くことによって、パレードに楽しく参加してもらうというアイディアです。

身近にあるペットボトルを持ち寄り、工作を行いました

パレードの小道具準備に参加していたのは子供たちだけではありません。先生たちも学校の校舎に生えているバナナの木から葉っぱを持ってきて、バナナ・スカートを制作するという即興アイデアを提案してくれました。

教室でバナナの葉を使ってスカートを作る先生

いよいよ、ゴロゴロパレード本番に挑みます！

ゴロゴロスタート直前、ワクワクを隠せない子供たち

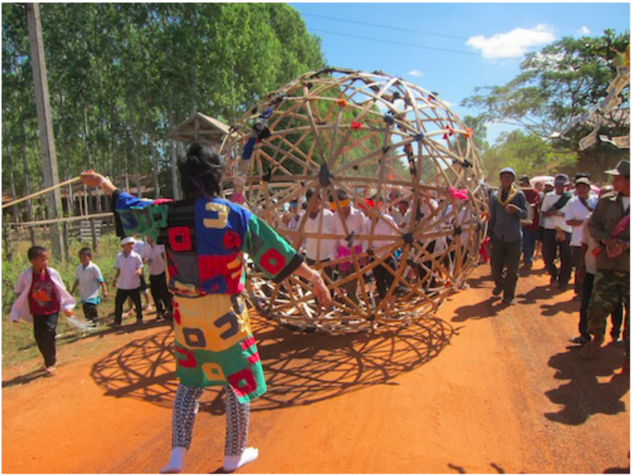
体感気温40度もあろうかという太陽直撃の暑さのなか、ゴロゴロパレードが始まりました。

お手製の旗を持った子供たちが先陣を切り、続いて自分たちで作ったお面や飾りををまとった子供たち、そして、中に子供たちが入ったゴロゴロが転がっていきます。子供たちに混じってパレードに参加する先生や、村の人たちも一丸となってお寺まで向かいま

す。

シャイな子供たちも、だんだんと緊張がとけてきました。巨大なスピーカーを木製の荷台に乗せ、ラオスの演歌を爆音で流し、陽気に踊っている人もいます。村の人たちが一丸となって楽しんでいる様子が皆の笑顔から伝わってきました。

パレードの様子



ゴロゴロのハッピを着て笛で号令をかける佐藤さん

佐藤さんの号令に合わせてゴロゴロは順調にお寺へ向かいます

炎天下の中歩いていると、通り沿いの家々からホースで水をかけてくれる人たちがいました。この水のおかげで、随分涼しく感じられます。ラオスでは、「水かけ祭り」という行事がありますが、村の人たちは水をかけることで子供たちのパレードに参加してくれているようです。

子供たちの中には、この水かけ祭りで使う用のおもちゃの水鉄砲を持参して、大人や子供たちに水をかけて楽しんでいる子もいました。子供、先生、村の人たち全員が一緒になって水びたしになることで、全員が子供のようにはしゃぎ、ゴロゴロパレードの一体感が増していきます。

ゴロゴロがお寺の境内に到着

ゴロゴロパレードもいよいよハイライト。一行はお寺の門をくぐり、本堂の周りを3周しました。

締めくくりに、先生や村人の代表者たちがお寺の本堂に上がり、お坊さんにお供えをします。

お祈りは静粛な雰囲気のなか行われました

お祈りの後、一行は踊りながら学校へ戻りました。

荷台に乗せられたスピーカーから軽快な音楽が流れ、陽気に踊る村人たち

無事にお寺までたどり着いた達成感からか、パレードが開始した時よりも皆の表情が生き生きとしています。また、大人も子供も誰もが分け隔てなく、一丸となってパレードをやりとげた、そんな雰囲気が感じられました。

お別れ会

ゴロゴロパレードの後は、お別れパーティーが開かれました。プロジェクトを代表して、日比野さんからお別れと感謝の言葉がありました。

「子供たちだけでなく、村を挙げての協力体制は日本では廃れつつある姿です。美術を教えに来ているものの、私たち側もポントゥン村から教えてもらっているものがたくさんあります。ぜひ来年も戻ってきたいです」

お別れ会にて、日比野さんと佐藤さんから挨拶

名残惜しそうに別れを告げる佐藤さん

あっという間にお別れの時間です。最後の最後、車に乗り込む時には皆抱き合って別れを惜しみ、来年もまた会おうと誓って村を後にしたのでした。

今回の交流で見えてきたこと

3週間、村長さんの家に居候し、村の方々と一緒に制作を行った佐藤さんにお話を聞きました。

「皆さんと一緒に生活し、制作活動を行う中で、ラオスの人たちは賑やかでありながら、とても働き者で対応力、応用力に優れたタフな人たちだということを目の当たりにしました。また、先進国と開発途上国の関係性とその支援のあり方についての認識のギャップを感じることもありました。

最新の設備がないからと言ってラオスの教育が劣っているかというと、一概にそうは言えないということも彼らの生活の中でたくさん見ることができました。地域とのつながりや、何か問題があればすぐに対処できる力は日本よりも強く、右に習えで先進国の後追いをするのではなく、ラオスにはラオスの土地と文化に合った発展の仕方を一緒に考えていく必要があると実感しました」

ラオス政府関係者との意見交換

今年は初めて、日比野さんと、佐藤さんとラオス政府教育関係者による、ラオスにおける美術教育をテーマとした意見交換セミナーも開催されました。

ラオス政府関係者、教育関係者からは率直かつ具体的な質問が出て、ラオス側は美術教育をどのように考えているか、私たち日本側はどんな協力ができるか、 腰を据えて話し合う良い機会になりました。

今年で4年目のプロジェクトですが、これからが本当のスタートだと感じました。また、毎年続けて行くことが何よりも大切だということもお互いに確認し合えたセミナー、美術教育の旅となりました。

企画名	ポントゥン村・美術部プロジェクト
日時	2014年11月9日（日）～11月12日（水）
会場	ポントゥン村小学校他
主催	公益財団法人　民際センター
助成	国際交流基金アジアセンター
参加者	日比野克彦、佐藤悠ほか
URL	http://www.minsai.org/activities/phontoum

中村綾花：フランス・パリを拠点に活動するフリーライター。著書は、世界で婚活の旅をしながら恋愛・結婚事情をレポートした「世界婚活」（朝日出版）。有料コンテンツ・サイト「cakes」にてパリの本当の日常をレポートする「すっぽんぽんパリ」連載中。https://cakes.mu/series/3055

55

いいね！

ツイート

0

G+1

アジアにつながる文化の輪！